

旅するムサビ 映像文化史体験 活動報告書 改訂版

活動情報

開催：2019年11月16日(土)～11月17日(日) 時刻：10時00分～16時00分
助成：一般財団法人さぬき生活文化振興財団 協力：武蔵野美術大学、空想藝術商會
会場：おおず赤煉瓦館本館2階/別館1階、ポコペン横丁

概要

2019年11月16日、11月17日に愛媛県大洲市肱南地区で開催されたアートクラフトイベント〈城下のMACHIBITO〉に当企画【旅するムサビ 映像文化史体験】が参加した。
約170年前の写真技術「湿板写真」と150年前に生まれた「活動写真」、当時実在した移動映画館やエジソンのプロジェクティング・キネトスコープを用いた活弁上映などの映像文化史を介した造形ワークショップと鑑賞活動を行った。

成果

旅するムサビプロジェクトは主に小学校、中学校に美大生が訪問して学生自身の作品を用いた鑑賞活動や造形ワークショップなどを展開する活動である。今回の【映像文化史体験】は黒板ジャックや対話型鑑賞ではなく造形ワークショップ、鑑賞活動に絞った。デジタル映像が主流となった現代において、約1世紀前の技術で映像および写真を手探りする追体験することにより、子供に限らず大人も、開かれている日本中から集まるイベントにおいて多くの人が興味を持つきっかけを作った。旅するムサビプロジェクトと大洲市との関係がこれまで以上の成果が出た。映像文化史家である松本氏が参加したことにより、おおず赤煉瓦館別館に常設展示されている映画カメラ及び映画機材コレクションの専門的な解説が行われ、コレクションの活性化が図られた。福尾氏が所有しているセルロイド製フィルムの中にはアメリカ製の切り絵アニメーション作品とみられるものもあった。湿板写真の造形ワークショップにおいて、各参加者が成人式、結婚式などの記念としてワークショップに参加した。これにより湿板写真のワークショップによって参加者の一生ものの節目の記念を貢献することができた。「地域」「学校」「機関」それぞれを学生を介して繋げることにより適度な距離が保たれ、無事問題や事故も起きることなく企画は成功した。

これらの活動により、地方地域のコミュニティに都心部から学生を主体とした人的交流によってその訪問先地域に新たなことづくりのきっかけを設けることができた。

今回のワークショップは事前予約制であるに拘らず、予定枠の4分の3が埋まる結果となった。

参加者も湿板写真撮影のため東日本や関西圏からの参加や、大洲市在住の方など、大洲市と他の地域を繋ぐ場となったと言える。湿板写真の撮影体験において格別おおきな問題が起こることもなく予定通り活動が行われ、2日間で計20枚の撮影となった。

この度行った各ワークショップは現代では珍しい100年以上前に使われていた実物のカメラ、映写機を用いた活動であった。またメディア面においてデジタル化が主流となった現代としては異質の材質であるフィルム彫塑及び湿板写真は、得られる像の結果も独特なものであるため催し物の記念品に非常に相応しい対象であると言える。また使用する機材も現在では珍しい形状のため、視覚的にも体感的にも古風でありつつも新鮮な体験を提供することが出来ていた。

反省点

1会計 企画進行と同時に予算を収集したことより、企画に対しどれだけの金額がかかるか具体的な指数が出せず本番を迎え、結果赤字となり学生1人あたり7,000円の自己負担となった。

また湿板写真や活動写真の材料(カラーリバーサルフィルム、スピリタス、銀など)が高価であること、両ワークショップに関する表立った前例がないため、参加費の相場が不明瞭であった。今後活動する際は企画開始の段階で予算を確定し、進行する必要がある。

2導線および会場 建築物(おおず赤煉瓦館)の構造上、両ワークショップの集合場所や上映プログラムの受付の不明瞭さや行きにくさによって当日の来場者が入り口で引き返すことが多々あった。今後活動を行う際は受付を一箇所に絞り、明快にアピールする必要がある。

活動参加者数

15名

武蔵野美術大学在籍生を始め、本校非常勤講師の松本夏樹と氏が所属する会社「空想藝術商會」から川村真理子、大阪芸術大学放送学科の学生、大洲赤煉瓦館旧館長、日本学術振興会特別研究員の福島可奈子など学内外から実行メンバーを構成し活動した。

下記詳細(敬称略)

武蔵野美術大学

・映像文化史体験実行委員会

山端健志、菊地知也、川岸三千花、中野雄一郎、西崎梨晴、山口衣織、伊東雄高、松橋絵菜、中本英美里

大阪芸術大学

・濱野龍征

日本学術振興会

・福島可奈子

空想藝術商會

・川村真理子、松本夏樹

アスール美術

・小灘精一

おおず赤煉瓦館

・福尾英明

集客数

2日間 約240名

<当文化活動における次回以降に向けての改善点>

作成 菊地知也 山端健志 川岸三千花

1 参加費

値段事前予約以外でイベント開催中に呼び込みでお客さんを集客しようと試みたところ、何人か興味を示してくれる人がいたが、参加費が高価であるため参加を諦める方がいた。両ワークショップ共に使用する材料費(薬品、フィルム)などの兼ね合いで妥協して今回の値段で出展したので、こちらとしてはいかに湿板の撮影・現像を体験が貴重な機会であるかを伝え、ワークショップの魅力とそれに伴う参加費を理解してもらえかが課題であると感じた。

2 参加者が子供連れの場合

湿板写真は撮影時に何秒間か被写体に静止してもらうことが必要である。特に小さなお子さんにはカメラの前で静止することが特に難しいように思われた。

せっかく時間をしばらく割いてもらったのにも関わらず、写真を撮って完成品をお渡しすることができなかったのも、今回のように小さなお子さん連れで家族写真を希望される方にはあらかじめワークショップ参加前にお子さんがカメラの前で静止できるか確認をとる必要がある。

今回参加した【城下のmachibito】は子供連れのファミリー層が多く見られたため、そちらにもアピールできると良い。

ただ、湿板写真はやや古風で少し渋い写真がとれるため、そういった魅力がスマートフォンやデジタル写真に慣れている人たちに認知されるためには少し伝え方に工夫が必要である。

シネマカリグラフィ(活動写真ワークショップでのフィルムを削る活動)に関しては子供の方が作業に没頭し、保護者が切り上げて帰るように子供に諭すことが多々あった。

子供と大人との描くことや装置駆動への関心や繊細部までみえる視力などの差が原因にあたるだろう。

3 宣伝、集客

もしワークショップの参加枠が空いた場合は呼び込みなどをすると良い。今回はA3サイズの画用紙で手書きのポスターを作り、それを手持ちの黒板に貼り付けて呼び込みをイベント会場で行った。(ポスターにはワークショップの概要を2、3行でまとめたシンプルな文章と、参加費、所要時間を明記。)

また呼び込みをする際には湿板のカメラの設置やニッケルオデオンワゴンの実演を行って集客した方が関心が集まり動員数も増えた。

4 撮影場所

今回は参加者1名に対して計4枚の写真を撮るプランを用意し、撮影場所はイベント会場内で好きな場所を選んでもらい撮影を行った。

現像フィルム(ガラス板)を持ち運びできるホルダーが一つしかなかったため、撮影場所とモデルの立ち位置やカメラの構図を決めてから、カメラマンは一度フィルムを作り暗室・現像部屋に戻らなければならなかった。

その際、お客さんには現像フィルム作りを一緒に見てもらうか、撮影場所で待機してもらうようにした。

野外で撮影をする際、車道側にカメラを設置することはなるべく避けた方が良い。

5 見本品の展示について

赤煉瓦館2階で一度ワークショップ参加者に集合してから、湿板の説明や見本品を何点かお見せし、

別館の一回に移動してワークショップを行っていたが、イベント期間中は混雑して移動が少し大変だったので二日目以降は初めから別館一回で集合することに変更した。

また2階の湿板写真の展示はただテーブルクロスを乗せた机の上に写真が置いてあるだけだったので、キャプションなども並べておくと展示空間として鑑賞者との距離が近づけるのではと感じた。

<まとめ>

次回も同じ場所でワークショップを行えることになった場合、ワークショップの受付および会計と案内係を設け、受付用の小さなテーブルも設置しておくが良い。

今回は個々に湿板、おもちゃフィルムの上映、フィルム塗り体験など、各自にワークショップの担当は振り分けられていたが、

側から見ると誰に参加の意思表示や質問をすれば良いのか不明瞭であったように思われる。

上記の事を踏まえ、瞬時に受付とわかりやすい空間演出を計画することも大事だと感じた。